

令和5年度 日本大学明誠高等学校 自己評価票

【本校の目指す学校像】

日本大学の「目的及び使命」にのっとり、明き、浄き、直き、誠の心をもつ、徳性豊かな人格の完成に努める。知性を高め、学問への情熱を養い、個性に応じた能力を最大限までに伸ばさせ、自主性を確立し、相互の信頼と敬愛とにより、協同調和の精神を養い、社会の良き一員たる人材を養成する学校を目指す。

【本校の特徴】

希望する生徒全員を日本大学及び難関国公立・私立大学へ進学させることを目標にしながらも、勉学だけでなく、学校行事・部活動にも積極的に参加させることにより、有意義な高校生活を生徒に与え、将来、社会に貢献できる人材になり得るため、高校生としての基本的な生活習慣、知識及び向上心の修得を目指しながら、自然豊かな環境の中で、充実した学校生活を過ごすことを通して、人間力の育成を行っている。

具体的には、各教科シラバスを作り、明確な指導目標を設定し指導の充実を常に図りながら、個々の生徒に注目し、生徒一人一人の学力向上を狙っている。また、文化祭でのクラスパフォーマンスや巨大壁画作り、芸術鑑賞教室等を通しての情操教育も重視している。さらには、年間を通じて立門指導、通学路での登下校指導、校内巡回指導、公共交通機関内での巡回指導に学校全体で取り組み、生徒の基本的な生活習慣の確立とマナーの向上、協調調和の精神が養えるように、教職員が一丸となって、教育活動及び学校運営に取り組んでいる。

【令和5年度の重点目標】

- *生徒の学力向上のために、授業評価アンケートの結果を基に各教科及び個々の担当教員が教授法の改善に取り組む。その際には、ICT委員会の協力の下、OpenDoor（ICT機器を利用した授業の教員相互の公開授業）や保護者対象の公開授業の機会を活用する。
- *基本的な生活習慣の向上に加え、特に登下校時のマナーについて重点を置き指導を行う。その際には、マナーを意識した行動が自ら行えるように生徒を導く。
- *教員による日々の観察と面談及びアンケートなどを通じて、生徒間のトラブルや個人の悩みをいち早く察知し、適切なアドバイスを通して、生徒が充実した学校生活を送れるようにする。
- *生徒が自らの学校生活を作り上げるように、学校行事の運営を生徒が主体的に行えるように導いていく。
- *生徒が自らの進路について積極的に関わられるように、授業の大切さを説きながら、補習、講習、模試及び学部訪問等へ意欲的に取り組むように生徒を導く。
- *情操教育の一環として、朝読書及び図書館の利用者数が増えるように、「図書だより」を積極的に発行する。
- *日々の学校生活を生徒が充実していることを内外に発信するために、紙媒体に加え、学校ホームページやSNSなどを今まで以上に積極的に活用する。

【令和5年度の自己点検・評価結果】

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度取組方策 (Action)
教育活動	「新学習指導要領」への対応 新学習指導要領に基づいた教育課程に従い、新学期開始前に教科ごとの担当者間で教育内容及び評価内容について意思疎通	2学年文系の生徒は、1学年に地歴公民で履修した「地理総合」、「歴史総合」及び「公共」の教科内容を理解し、希望進路を踏まえて2学年の地歴公民の科目選択を行った。生徒は第1選択（3学年に受験科目とする	A	令和6年度に全学年で新学習指導要領に合わせた教育課程（学年進行）の導入が完了する。学習指導内容、試験問題、成績評価方法について検証する。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度の取組方策 (Action)
教育活動	<p>を行い、シラバスに反映させる。</p>	<p>科目)と第2選択(第1選択の次に学びたい科目)の2科目を選択し、興味・関心を強く持ち、学習意欲が増すことで学力向上につなげた。</p>		
	<p>ICT教育への取組 各学年に合わせた「総合的な探究の時間」の実施計画を年度開始前に作成し、授業実施前には、学年スタッフでしっかりと打合せの下、統一感を持って指導に当たる。 ICT導入実行委員会と連携し、生徒のiPad使用がスムーズに行えるように、ICT支援員の活用を計画する。 各学期に1回以上、全教員を対象に、情報スキル向上のための研修会を実施する。</p>	<p>全学年にiPadが導入され、学級のホームルーム活動及び授業で大いに利用されている。授業においてiPadを用いることで教員が板書する時間及び生徒がノートに書き写す時間を短縮でき、より多くの単元内容を扱うことができた。また、教員はiPadで生徒に課題の提出をさせることで成績処理の時間を大幅に短縮でき、生徒との二者面談等他の教育活動の時間を増やすことができた。 1学年の総合的な探究の時間ではiPadでインスパイア・ハイの動画を視聴し、生徒同士で考え方や意見を共有し、新しい価値を発見することができた。2学年ではiPadを用いて修学旅行の調べ学習や発表を行った。 部活動や委員会活動ではスケジュール、活動内容及びトレーニング方法を共有するためにiPadを有効に活用した。 生徒は学術発表を行う学校行事であるアカデミア明誠や文化祭で動画作成を行い、情報技術を向上させた。 学校全体でICT教育をスムーズに実践するために、ICT支援員が月一回定期的に来校している。生徒はiPadの使用についての疑問点を聞くことができた。</p>	A	<p>令和6年度より新校舎を利用した教育が開始される。情報通信環境が整備され、更に充実したICT教育を実践する。新しい教育環境の活用方法の共有と問題点の共有と改善を即時に行うことを心掛け、新しい教育環境の活用に努める。 授業ではアクティブラーニング的な授業を各教科で展開していく。</p>
	<p>「高大接続改革」への対応 1学期に生産工学部の担当者と打合せを行う。 2学期に実施内容、日程を確定する。</p>	<p>高大接続教育では、令和4年度まで実施していた生産工学部進学予定の3年生を対象とした「情報リテラシー」の講座は、各付属高校間の状況の変化から、実施できないことになってしまった。 日本大学の各学部が行う高大接続教育への授業参加について検討したが、本校生徒の大多数が部活動又は生徒会活動に参加しており、学部への通学時間がかかるため参加することができなかった。</p>	C	<p>本校の生徒にとって利用可能な高大接続教育を日本大学各学部と共に検討していく。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度の取組方策 (Action)
学校生活への配慮	いじめ防止のための取組 4・5月と9・10月に各担任による二者面談を実施する。学校生活の状況や個々の悩みを確認する。 7・12月に三者面談で全校生徒を対象にアンケート調査を実施する。 事案発生の際は、随時「いじめ防止対策委員会」を開催する。	各担任が二者面談を実施する中で、学校生活の状況や個々の悩みを確認することによりいじめの早期発見を心掛けた。 7・12月に三者面談で全校生徒を対象にアンケート調査を実施した。日常では見えない事案を表面化でき初期対応のきっかけにすることができた。重大事案は発生せず、「いじめ防止対策委員会」の開催はなかった。(注) その他に生徒間におけるトラブルで報告が上がってきたものは担任・学年主任が生徒・保護者との対応を行い、解消傾向にある。	B	いじめが重大事案に発展することなく、最小限にとどめられるように、早期発見ができるよう生徒・保護者との関係を築く。 担任が一人で抱えるような状態を作らず、すぐに報告できるような連絡体制を採り、いじめの被害報告を受けた際は初期対応の重要性を意識しながら素早く対応する。 授業担当者が生徒の様子を随時確認し、気になる生徒がいた場合は担任との連絡を密にとる。 いじめ事案に対する対応の研修会等を行い、全体での共通理解をもって対応する。
	学校生活の充実とマナーの向上 令和4年度に掲げた「これをしたらダメ」というルールへの押し付け的な指導から生徒が自分の判断で適切な行動や姿勢をとっていけるように促す指導に転換していくことを通して、当事者意識を持った生徒を増やす。	制服、頭髪(ツーブロック)、文化祭でのスマートフォン使用等従来のものから変更したが、この過程で生徒会へアプローチして生徒からの意見を取り入れる形を作りながら変更することができた。 まだまだ通学マナー(車内・通学路)に関する地元住人からの指摘がある。下校指導を積極的に行っているが、生徒の意識向上が更に望まれる。	B	生徒の当事者意識の醸成のために、風紀委員会だけでなく、生徒会本部の生徒も巻き込んだコアグループを作り、生徒発信でマナーや規範遵守の姿勢や行事の運営までができるような集団に育てていく。また、生徒の意見をどこまで酌むのか、改善の必要があるものなのかを生徒と教職員が一緒に考えていく。ルールメイキング委員会のような組織を作り、保護者も含めてどのような学校を築いていきたいのかを皆で考える風潮を作り上げていく。
課外活動	自ら行動する生徒会活動 全ての生徒の活動は「生徒会活動」という認識を生徒に持たせることを通じて、生徒の自主的・自発的な活動を援助する。	各種行事の運営のルールについて、生徒自身が話し合い、考えることができた。	B	より生徒の主体性、自分たちで考えて行動する力を育むように工夫する。 生徒一人一人が自分たちの学校のことを「自分ごと」として捉え、意見や考えを発信できるような環境・仕組み作りをする。
	母校愛の育成 母校愛を育むために様々な面から援助する。	県総体の応援活動をはじめとして、ラグビー部の応援や4年ぶりの野球応援等に、希望者を募って行くことができた。	B	生徒が母校の選手を応援する機会がなるべく多くなるように、応援計画を立てる。
	効率的な生徒会活動 他の分掌と協力をして、生徒が学校行事や部活動に全力で取り組める環境を作る。	それぞれの学校行事において、適切に他の分掌と協力をしながら、運営を行うことができた。	B	新校舎の完成に伴い、新しい環境での行事運営を一から考える。そのためには、可能な限り早めに、関係部署と連携を取る。
進路指導	日本大学への進学者数増加に向けた取組 夏期・冬期講習(希望者) 日本大学学部訪問(2年生9月) 日本大学学部説明会(不定期) 春期講習(1,2年生全員) オープンキャンパスや体験授	令和5年度は70%を超える生徒が日本大学へ進学した。データを基に生徒との面談を密に行い、各生徒の多様なニーズに合わせた進路決定を進めつつ、日本大学各学部とのマッチングを提示することで、日大進学希望者数の増加を図り、上述の進学率につなげることができた。 また、入学時より日本大学への進学意欲	A	ICT環境を活用した情報共有を充実させる。 模擬試験と基礎学力到達度テスト標準化点の相関を生徒に意識させるなど引き続き模試の有効活用を推し進める。あわせて、日頃の授業の大切さを生徒に浸透させる。 オープンキャンパスや学部訪問等の行事へ参加することの大切さを伝え、日本大学への興味を高めるとともに、ミスマッチのない状態で進学できる学力の伸長を目指す。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度の取組方策 (Action)
進路指導	<p>業等の案内 (随時)</p> <p>日大チャレンジ模試 (1・2年生 2月, 3年生 6月)</p> <p>実力診断テスト (1・2年生 5・10・1月)</p> <p>基礎学力到達テスト対策講座 (通年)</p> <p>進路集会 (不定期)</p> <p>二者面談 (不定期)</p>	<p>が強い生徒はもちろん, そうでない生徒に対しても積極的にオープンキャンパスや体験授業等の案内を行った。結果として全付属高校の中でも比較的多くの生徒が参加しているとの報告を受ける学部もあった。</p> <p>早期からの面談や集会を繰り返し行い, 基礎学力の錬成に励みやすい環境を提供した。</p>		
保健衛生	<p>生徒の健康の保持増進</p> <p>身体測定・健康診断実施 (4月)</p> <p>違法薬物講座, 性教育講座, AED救命講習会</p> <p>「保健だより」の毎月の発行</p> <p>「生徒相談室だより」の定期的な発行</p> <p>強歩大会, 修学旅行等学校行事前の事前健康調査</p>	<p>健康診断は, 業者に委託して実施した。感染症予防のため, 学年ごとに時差登校をさせて, 待ち時間を減らすことや生徒同士の接触が少なくなるよう工夫した。健診方法や当日の流れとして, 業者と教職員が連携しながら当日の生徒指導を行った。欠席者に対してもフォロー日に受診若しくは個人で受診させることで受診率は100%を達成した。</p> <p>違法薬物講座は, 生活指導部主催で1年生に実施した。AED講習会は, 運動部の生徒を対象に上野原消防署に協力していただき実施した。</p> <p>「保健だより」は, 主に月に一度のペースで発行した。「生徒相談室だより」も発行し, カウンセラーの紹介等を含め, カウンセラーを利用できることを周知徹底した。</p> <p>それぞれの学校行事前の事前健康調査は学年や教科担当と連携しながら BLEND のアンケート機能で実施することで, その内容を関係部署で共有した。未提出や再提出者の追跡に時間を要するので, 担任や学年の協力を得てスムーズな調査を実現した。</p>	A	<p>業者と綿密に連携を取りながら健康診断を運営する。事後措置について業者と連携できる体制を整える。</p> <p>AED講習については, 運動部の生徒だけでなく, 文化部の生徒や学年ごとにでも実施できるように計画を立てる。</p> <p>「保健だより」は, 月に一度にこだわらず, 感染症の発生状況や行事の前後等, 生徒の動向に合わせて発行できるようにする。</p>
	<p>生徒のボランティア活動・委員会活動の充実</p> <p>学期ごとに各学年で校内外美化活動の実施</p> <p>2, 3年生対象校内献血 (11月, 2月)</p> <p>保健委員会から保健に関する呼びかけ (各行事)</p> <p>美化週間の設定 (年5回)</p>	<p>ごみの分別はおおむね良好であるが, 新校舎の建設に伴いゴミの量が増加した。部活動等では分別できていないこともあった。校内外美化活動は, 各学年ともに年に1度活動できた。</p> <p>校内献血活動については, 2・3年生共に希望者募集の前に資料を配布して事前指導を実施した。生徒が各自で献血に関する動画も視聴した。事前指導実施により, 献血に対する意識付けを行い, 献血希望者数も一</p>	B	<p>新しい校舎なので, その清潔さを維持できるように清掃方法について, 新年度開始前に整える。</p> <p>日頃の学校生活はもとより, 各種行事運営中のゴミ分別の意識付けを行う。</p> <p>献血の協力者が年度ごとにばらつきがあるため, 40人以上の協力者確保を目指す。そのために, 赤十字血液センターの出前講座を活用するなど, 生徒の献血への理解を深める。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度の取組方策 (Action)
保健衛生		<p>定数を保っている。献血に参加できない生徒も事前指導を通して献血活動の啓発になっている。今年度の献血も、3年生は11月に実施し、2年生は2月に実施した。</p> <p>保健及び美化委員会は誠祭(文化祭)でのトイレ見回りや校内清掃等の活動をした。委員会活動では、怪我予防指導や救護補助、清掃等をした。美化委員会は、各行事前に美化週間を設け、校内清掃を行うことで、例年よりも活動が充実した。</p>		
図書	<p>生徒への読書に対する啓発活動の充実</p> <p>年度当初に「図書だより」の作成当番を図書部の教員で決定し、本の紹介やコラムを宣伝し、毎月の発行を目標とする。</p> <p>ビブリオバトルの実施に当たっては、図書委員のみならず、生徒の参加を促しながら継続して実施し、学校の文化活動とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年別予選(5月) ・アカデミア明誠において決勝大会(優勝者は校外の大会へ出場を計画する) <p>校外のビブリオバトルの大会にも募集をかけ参加するように啓発する。</p>	<p>図書室のスペースが狭く、教室から遠いという立地条件の中で、図書室の利用者数を増やし、より環境を整えて魅力のある図書室作りを目指した。昼休みの図書当番は平常どおり実施した。さらに、校内のビブリオバトル大会を図書委員中心に行い、各学年の優勝者はアカデミア明誠に参加させることができた。</p> <p>その中でも以下のような方策を行った。</p> <p>① 「図書だより」を毎月発行して、読書の魅力を語り、令和5年度5月から「図書だより」は各クラスの図書委員が分担を決めて作成するようにした。なお、令和5年度からはBLENDでの配信に切り替えた。</p> <p>② 各クラスから購入希望図書を募り、できるだけ多くのリクエストに応えられるよう試みた。生徒だけでなく教員からもリクエストを募った。</p> <p>令和5年4月から12月までの図書室の開室日が135日であったのに対して、生徒の利用者数は214名、図書の貸出し数は289冊であった。</p>	B	<p>新校舎が完成することに伴い設置されるサテライト図書スペースには、新刊を配置することで、魅力的な図書スペースとする。また、現在の本館1階に置かれたままになる図書室の利用者数を減らさない工夫を考え、図書室の利用者数や図書の貸出し数が全校生徒の在籍者数を上回ることを目標とする。</p> <p>読書が生徒にとって、より身近なものとして意識することを図書部の活動目標として、ビブリオバトルを積極的に活用し、生徒が読書に親しむ機会を増やす。</p>
広報	<p>直接訪問による広報</p> <p>4月：来年度入試用学校案内作成</p> <p>6月：1学期末発行広報誌編集</p> <p>11月：2学期末発行広報誌編集</p> <p>2月：3学期末発行広報誌編集</p>	<p>受験生である中学生に対して、本校についての認知度や理解度を増すために、積極的に中学校の学校説明会に参加した。</p>	A	<p>教職員による中学校訪問を継続して行いながら、更に多くの学校から高校説明会等への参加依頼が届くように働き掛ける。また、進学塾へのアプローチを強化するために、塾訪問の代行サービスを取り入れていく。</p>
	<p>インターネットによる広報</p> <p>4月：年間を通して「inter-edu.com」特別サイトの特集記事作成協力を依</p>	<p>令和5年度はホームページの効果的な活用について再確認して、情報を精査しながら、更新頻度を上げた。また、SNS、特にInstagramやXの更新も行い、内外への広報</p>	B	<p>インターネットやSNSを活用した広報活動をより効果的に行うために、組織として対応することで、ホームページやブログ、SNSの更新頻度を上げていく。</p> <p>インターネット広告は、広告を届けるエリアや対象を更に絞った配信を行</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和6年度の取組方策 (Action)
広報	頼する。	を充実させた。 競合校のホームページ上に広告を出す、ターゲティングバナーを活用し、受験生やその保護者を本校のホームページに誘導するようにした。 上記のように校内外への情報提供において媒体が多様化した。		い、本校の魅力を効果的に発信できるよう取り組んでいく。
	紙媒体による広報 中学生や保護者及び受験生等に直接配布する機会を見つけ、即時性のある情報の提供を心掛ける。	生徒や教員のインタビュー記事等を雑誌やチラシにして配布する広報活動を行った。また、本校のトピックスをチラシとして作成し、入試説明会や合格発表の通知と合わせて配布した。	C	雑誌については費用対効果を考え、今後の利用方法を検討する。 自作のチラシは学校を訪れてくれた人たちへの広報として積極的に活用する。
管理運営 (分掌・会議・委員会、財政、施設・設備等)	安心安全なキャンパスの構築 建設スケジュールに従い、新校舎の建設工事を進める。これと並行して、新校舎の具体的な利用計画について検討を行う。また、日本大学本部及び施工業者と連携して大規模事業計画に基づき、キャンパス整備計画を進める。	新校舎建設スケジュールに基づき令和4年度末に2階部分までの基礎躯体工事を完了したことを受け、令和5年度からは建設スケジュールに若干の遅れは生じたが、令和6年度の新校舎利用開始に向けて令和6年2月に竣工し、同年3月に竣工式を行った。	A	新校舎への機能移転に伴い、2号校舎と本館管理棟の利用目的を変更し改修を行い、9月には、2号校舎及び本館管理棟の運用を開始する。また、1号校舎に残る機能を2号校舎に移転することで、年度内に1号校舎の解体工事を開始する。
	新校舎建設に伴う財政管理 返済計画に即した資産管理を適切に行う。 学費の改定を含め、収入確保について継続して検討する。	新校舎完成に合わせて、学費改定も検討していく必要があるが、大学本部の方針により、現在は改定できない状況にある。	C	引き続き大学本部と調整する。 新校舎の運用開始により、光熱費、施設整備費等の管理を徹底し、引き続き費用削減に取り組む。また、入試委員会をはじめとした各部署が連携し、安定した生徒数確保に向けて、様々な工夫をする。

〔令和5年度の自己点検・評価結果概要〕

新校舎完成後の「新しい明誠高校の教育活動」をイメージした各種取組が、各分掌や各教科を通して行われた。生徒の人間力育成を共通目標として、生徒が自ら考えて行動できるように導こうという姿勢を持って教職員が生徒指導に当たった。特筆すべきこととして、文化祭において中夜祭が生徒会企画として実施されたことや文化祭中のスマートフォンの使用ルールを生徒が自ら設定したことは、新しい日大明誠の生徒像をイメージさせてくれるものであった。また、生徒からの申出を受けて、男子生徒の髪型（ツーブロック）の指導ルールの改定について生徒を巻き込み学校として取り組んだことは、これからの日大明誠高校の在り方を象徴しているとも言える。

生徒が自ら動く姿勢づくりは、タブレットを利用した学習活動を通しても行われている。令和5年度の1年生から導入した授業中のオンライン英語会話は、英語によるコミュニケーション能力を高めるだけでなく、日本語におけるコミュニケーション能力を高める効果も目指している。また、積極的な学習活動を通して実現される近年の進学状況は、日本大学に7割を超える生徒を安定的に進学させることができるようになり、部科校の中に「純然たる付属高校」としての本校の地位を築くことができた。他大学への進学者を含めて結果を見ると、9割以上の生徒が大学に進学し、進路未決定者（希望進路実現のために再チャレンジする生徒、いわゆる浪人生）が一桁台に収まることも、進学先として中学生及び保護者から高く評価される理由の一つである。

〔令和6年度の重点目標〕

10年前に始まり新校舎完成を最終目標とした学校改革が、新校舎の完成により一つの区切りを迎える。そして現在、日本大学の事業として進めている大規模事業計画が、令和7年度末には完成を迎える。令和6年度は、「新しい日本大学明誠高等学校の創造」に向けて、文字どおり新しい環境の中で、本校の新しい教育活動を創造する年としなければならない。

学校改革の中で掲げられた「人間力の育成」は、「一人ひとりが文武両道」という形で既に表れているが、令和6年度においても引き続き、生徒育成の柱となる。また、令和7年度までの間において校内整備のための工事が行われることから、教育活動がスムーズに行えるように、教職員全体が、本校の特徴でもある「学校全体が一体感」を持って物事に当たる必要が更に求められている。

令和6年度においても生徒自身の行動を促す指導を引き続き行うことで、「生徒が自分ごととして学校生活を受け止め」、勉強はもとより、部活動、委員会活動等の充実を推し進めることが必要である。そのような生徒会活動を推進していくために、文化祭、体育祭、アカデミア明誠等の大型行事の充実と併せて、生徒が試行錯誤を重ねて得る経験を基に、引き続き「生徒が成長する学校」であり続けることが求められている。

新校舎における新しいICT教育環境を活用した学習指導により、なお一層の学力向上を目指すことは学校改革の目標の一つであるが、令和6年度は特に、ICT機器の活用をより具体化することが求められている。確かな学力に基づく高い進学率は本校の特徴であるが、本校が日本大学の付属校として確固たる地位を築くことで、これまで以上に地域や社会から評価される高校となることは、これからの本校のあるべき姿でもある。在校生及びその保護者からの評価に加えて外部からの評価を得ることで、引き続き安定した生徒数確保を実現し、財政基盤の確立を目指す必要がある。

以 上

(注) 上記学校自己評価票を法人本部に提出した後、クラス内のいじめが発覚しました。調査に時間を要しましたが、最終的には、学校として加害者に対して特別指導を行うとともに、いじめ防止対策委員会がクラスの全生徒に説明し、問題点を話しながら、生徒とともに「いじめ」について考える時間をとりました。加えて学年集会に教頭が参加して、「日ごろ良いクラスであるにも関わらず、いじめが起こってしまった」ことを伝え、誰でも被害者や加害者になりえるという「いじめのこわさ」について話した後、いじめに対する学校の姿勢を改めて伝えました。